

國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『土御門家記録』所収近世文書の解題と翻刻（その2）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高見澤, 美紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000691

國學院大學図書館所蔵

『土御門家記録』所収近世文書の解題と翻刻（その2）

高見澤 美 紀

はじめに

國學院大學図書館が所蔵する貴重書二二〇八の『土御門家記録』に含まれる近世文書については、その一部を翻刻・解題を前稿^{〔1〕}で行った。その際に触れなかった安政五（一八五八）年の「彗星出現一件」と一括された史料群について、本稿で解題・翻刻を認めておく。

一、史料群「安政五年戊午從八月上旬至九月下旬 彗星出現一件」について

本史料群は「安政五年戊午 從八月上旬至九月下旬 彗星出現一件 晴雄」と墨書された包紙に一括された、彗星測量の図・記録および彗星考・勘草・勘文控、全32点である。

安政五年八月から九月にかけて観測された彗星は、十九世紀中で最も美しい彗星の一つ、と称されるドナティ彗星（ドナチ彗星、Donati, 1858 VI）である。イタリア人天文学者ジョヴァンニ・バッティスタ・ドナティにより発見

されたこの彗星は、八月上旬から肉眼で見えるようになり、九月中旬に二等級、尾の長さ四度。十月に尾の長さ四十度、最大幅十度となり、十一月初めまで肉眼で確認できた。大熊座としし座の境付近からかみのけ座、うしかい座、蛇つかい座、さそり座、みなみの冠座へと南下した。日本においても肉眼で見ることが可能で、様々に記録された。⁽²⁾

なお、本史料群には「毎日垂球行記」と題された安政六年六月廿九日から八月廿五日午中の記録や、文久元（一八六一）年五月下旬から七月上旬のテバット彗星（Tebutt、1861 II）、翌文久二年七月下旬から八月下旬のスィフト・タットル彗星（Swift-Tuttle、1862 III）出現時・変異ト・択申日時等の勘文留が含まれている。⁽³⁾

二、書誌事項と翻刻

本稿では便宜的に本史料群に含まれる史料に1から32まで、包紙に（1）～（3）の番号を付し、書誌事項と、文章がある場合はその翻刻を掲げる。⁽⁵⁾ なお本史料は本学ホームページのデジタルライブラリーに全点掲載されている。⁽⁶⁾ そのため本稿では史料中の図画・表は省略、備考欄に特徴等の所見を記し、史料中に文章がある場合は翻刻を掲載した。また備考欄には、『國學院大學図書館所蔵 中近世文書書籍目録』⁽⁷⁾ 三三〇～三三三頁に掲載した際の番号（貴二二〇八一～一二三）を《》で併記し、本稿において書誌事項に若干の補訂を加えるものとする。

*包紙（1）

〈作成年代〉安政五年戊午八月上旬～九月下旬 〈差出〉晴雄「土御門晴雄」〈宛先〉——〈形態〉包紙 〈数量〉1
 〈法量〉縦44.7×横56.5cm 〈備考〉1から32までの史料32点を一括する包紙、包紙上書あり

〔翻刻〕（包紙上書）

「安政五年戊午

彗星出現一件

從八月上旬

至九月下旬

晴雄
」

*包紙（2）

〈作成年代〉（年未詳） 〈差出〉 — 〈宛先〉 — 〈形態〉 包紙 〈数量〉 1 〈法量〉 縦24.0×横31.1cm
〈備考〉 《八一—》 / 1から7の史料7点を一括する包紙、包紙上書なし

1. 彗星出現につき初度勘文控

〈作成年代〉 安政五年戊午八月十三日 〈差出〉 晴雄「土御門晴雄」 〈宛先〉（議奏） 〈形態〉 折紙 〈数量〉 1
〈法量〉 縦30.7×横42.5cm 〈備考〉 《八一—一—》

〔翻刻〕

（端書）「初度

安政五年戊午八月差出議奏」

自今月上旬頃曉東北之天彗星出現候、宿度者翼宿^二有之候、上旬之頃快晴稀^二、兎角雨氣曇天相続不得測量候、一昨

十一日曉雲氣散窺之處東山辺相見候、十二日曉雲靄有之不窺得候、同日昏後西北之天出現候、光芒凡二三尺計、初更前者山頭二没候、曉者太陽二先而出現、夕者太陽二後而入没候義二有之候、併過日来雲氣覆候日多候故不得蜜測候得其、先此段言上仕候也

八月十三日

晴雄

2. 彗星出現につき二度目勘文控

〔作成年代〕安政五年戊午八月十六日 〔差出〕晴雄「土御門晴雄」 〔宛先〕— 〔形態〕折紙 〔數量〕1

〔法量〕縦32.1×横44.0cm 〔備考〕《八一—一二》

〔翻刻〕

〔端書〕「二度目

安政五年戊午」

從今月上旬頃晨昏彗星出現、於翼宿之度太微垣之属星常陳星之側、光芒北指、其長二三尺計、戌刻前没乾隅、寅刻後出艮隅、是近北極故入地之浅而周天之速也、上旬來夜々陰晴不定屢難測得、十一日已後所見聊東進去翼宿移軫宿、今雖近紫微・太微之兩垣、無犯入者強無其恐歟、天文大成曰彗者除旧布新余殃不尽為大旱飢暴疫疾長大見久災深小短見速災浅云々、今年春來氣候不順陰陽錯行風雨不時故、上陽之氣凝結而成彗星者也、但旧史古籍拳其占者許多而或為兵革喪亡、水火・地震・流疫等之徵、然異星出現之事和漢每度而其応徵有無者蓋因治乱之時世無定例者也、今度出現之彗星可有時候不調之變歟、今也 聖德及衆物之時、亦何有他變異乎益被加 宸慎被 崇敬 神明者天星可消散矣、仍謹所勘申也

八月十六日

晴雄

3. 安政五年戊午八月廿二日昏測（彗星所在図）

〔作成年代〕 安政五年戊午八月廿二日昏 〔差出〕 — 〔宛先〕 — 〔形態〕 切紙 〔数量〕 1

〔法量〕 縦24.0×横17.0cm 〔備考〕 《八—一—三》／北斗七星と常陳星が描かれ、常陳星に対して左に「五度アリ」、

右に「五度計」かかる形で黄色に彩色された彗星が記される／料紙を斜めに置いて使用、上下左右の指示あり

〔翻刻〕（図略）

安政五年戊午八月廿二日昏測

常陳星 地上十五度四十分 西北卅八度

彗 地上十一度 西北卅三度

彗ノ芒十度計歟

4. 安政五年戊午八月廿四日昏測（彗星所在図）

〔作成年代〕 安政五年戊午八月廿四日昏 〔差出〕 — 〔宛先〕 — 〔形態〕 切紙 〔数量〕 1

〔法量〕 縦24.0×横17.0cm 〔備考〕 《八—一—四》／北斗七星と常陳星が描かれ、常陳星にかかる形で黄色に彩色さ

れた彗星が記される／料紙を斜めに置いて使用、上下左右の指示あり

〔翻刻〕（図略）

安政五年戊午八月廿四日昏測

常陳星 地上十五度 西北卅八度七分

彗 地上十三度 西北卅度

5. 安政五年戊午彗星出現図（八月十四日～九月一日昏）

〈作成年代〉安政五年戊午 〈差出〉——〈宛先〉——〈形態〉堅紙 〈数量〉1 〈法量〉縦27.7×横40.3cm

〈備考〉《八一—一五》／八月十四日から九月一日昏までの彗星所在を朱線で記したもの。北辰の北西方面、三台のうち中台から大角にかけての移動がみとれる

6. 安政五年戊午彗星出現図 謹所目測之図（八月十四日～九月十八日）

〈作成年代〉安政五年戊午 〈差出〉——〈宛先〉——〈形態〉堅紙 〈数量〉1 〈法量〉縦27.8×横40.5cm

〈備考〉《八一—一六》／太微垣・天市垣に八月十四日から九月十八日の彗星所在を朱線で記したもの／赤道・黄道の書き入れあり

7. 安政五年戊午彗星出現図（八月廿九日昏～九月十三日昏）

〈作成年代〉安政五年戊午 〈差出〉——〈宛先〉——〈形態〉堅紙 〈数量〉1 〈法量〉縦28.0×横40.5cm

〈備考〉《八一—一七》／八月廿九日昏から九月十三日昏の彗星所在を朱線で記したもの。天市垣の詳細記入あり／赤道・黄道の書き入れあり

*包紙（3）

〈作成年代〉安政五戊午年 〈差出〉― 〈宛先〉― 〈形態〉包紙 〈数量〉1 〈法量〉縦23・2×横15・3 cm
 〈備考〉《八一二》／8から12の史料5点を一括する包紙、包紙上書あり

〔翻刻〕（包紙上書）

「安政五年戊午

彗星出現一件」

8. 彗星之弁

〈作成年代〉安政五年戊午秋八月 〈差出〉― 〈宛先〉― 〈形態〉豎紙（左右双辺・有界） 〈数量〉1
 〈法量〉縦24・7×横34・3 cm 〈備考〉《八一二―一》／版心に「鈴木氏所蔵」とあり

〔翻刻〕

彗星之弁

今茲安政五年戊午ノ秋八月、太陽西へ落ルノ後北西ノ間へ彗星躡レ須臾ニシテ地ニ入り、太陽東へ上ラントスル前復
 東北ノ間ニ出現ス、ソレ戊亥ノ方位ハ乾ニ属ス、乾ノ卦タルヤ進ミ動キ精粹^{ツト}メ行フテ息ザルノ徳有リ、其体ハ円
 満ニシテ満レハ虧ルノ戒ヲ寓ス、五行ニ取テハ金トス、金ハ秋ニ属ス、又鏡ノ象アリ、鏡ニ正アリ、不正アリ、楊貴
 妃ノ顔モ正ナル鏡ニウツセハ其影正シクシテ美^{ウツケン}トイヘトモ、不正ノ鏡ニウツストキハ其影不正テ醜^{ユカミ}シ、如此美醜ノ
 異ナルハ鏡ノ所為ナリ、今ヤ彗星ヲ觀ルコト海内ノ人而已ナラス、海外ノ人モ亦觀ルヘシ、忝ナクモ正治ナル皇邦
 ニ於テハ全ク吉兆ナレトモ、若ヤ海外不正騒乱ノ邦ニ於テ此彗星ヲ觀ルトキハ必ス凶兆ナリ、如此吉凶ノ兆治乱ニ因

テ異ナリ、然ルカ中ニ世俗多クハ古ヘ争乱ノ時出現セシ彗星ノ兆ヲ以テ、今太平ノ世ニクラヘ如何アラント疑惑スルハ愚ト云ヘシ、凡万般事業ノ人々怠リナク強メ行フテ息ムコトナク、尚モ正直ヨリ出ル儉約ヲ守リ、不正ヨリ起ル驕奢ノ心ヲ払ヘト、此彗星ヲホウキボウ顯スハ天道不言ノ教戒ナルヘシ

9. 九月二日昏時球行数書上

〔作成年代〕（安政五年）九月二日 〔差出〕伊藤信興・松浦浩静 〔宛先〕小澤齋宮様 〔形態〕切紙 〔数量〕1
〔法量〕縦16.7×横14.2cm 〔備考〕《八一―一二》

〔翻刻〕

今日昏時 御球行

八万零三百七十

右之通相成候様奉存候、以上

九月二日 伊藤信興
松浦浩静

小澤齋宮様

10. 順天堂福田塾彗星考

〔作成年代〕（安政五年） 〔差出〕浪華天学家 南本町四丁目順天堂福田塾施印 〔宛先〕— 〔形態〕切紙

〔数量〕 1 〈法量〉縦24・8×横16・6 cm 〈備考〉《八―二―三》／木版多色摺（彗星図のみ朱刷）／年代比定は文中に

「半日ころり」の語があることによる

〔翻刻〕

彗星は天象固有の星体にして、夜々仰視るところの星象とおなじ、其出る事五七年を隔て又は連年ニ視ることも有ものハ其行環大ニして一種ならず、日光をうけて其芒を指ものなれば、其消滅することも亦はやし、西洋ニは日月氣朔の如く推算して出現の時日をするすといふ、此ごろ暮と曉に西東に見ゆるとも因より定まれることにして、怪しむことにあらざるなり、決して附会の感説をなして、人心を恐動する事なかれ

又此ごろ半日ころりとかいふ流行の疾病は、其原因当年暑中ニ雨湿多くして其鬱氣昇散せず、大氣中ニ在て自から氣兼の人体ニ透りして、此病症を發する也、おのく飲食色の三事を慎ミ、摂養を專一とせば此患をのかるべし、若過て其疾を得は、速く上好の焼酎を飲むべし、忽ち氣發して輕症ハ速時ニ治すべし

（彗星図略）

南本町四丁目

浪華天学家

順天堂福田塾施印

11. 彗星之儀ニ付奉申上候

〈作成年代〉（安政五年）〈差出〉松浦浩静 〈宛先〉―― 〈形態〉 縦紙 〈数量〉 1 〈法量〉 縦28・0×横40・0 cm

〈備考〉《八―二―四》

〔翻刻〕

彗星之儀御尋^二付奉申上候

当年八月上旬より彗星現申候^而、未明にハ東寅之方に見え申、暮後にハ西戌之方に見え申候、十三日より見始申候、星体ハ明らかに候得共、光芒は薄く其色淡黄^二御座候、長式尺計、北斗天璣星之傍に向ひ申候、十四日之未明前に下台星の下にありと見申候、此星種々の名を申、籊星・牛角星・天槍・天攪など、其出現之状により名け申候、春秋に申候^二李八月之高き時を月孛と申候、其ことくなる故に申候、^一漢書に申候白氣ハ状を論せず、只芒氣により名け申候、或ハ芒長きをなる故に申候、長庚ハ長く続と申心にて申候、漢書に申候白氣ハ状を論せず、只芒氣により名け申候、或ハ芒長きを以て長星とも申、尾ありと見て尾星とも申候、皆彗星之事に御座候、此星常に見え不申候故運行難測御座候、或は天上高くめぐり又地に近づき申候、其地に近づき申候時見え申候星体を古説に地中より升起申候金石砂土之氣凝りて成ると申候へ共、それハ流星・隕星の事に御座候て彗星之事にハ無御座候、星之状豊隆にして玲瓏たり、玻璃鏡のこともなるに日の光これを照射するに返照せず、光つき通りて背面に白氣を發し申候事、灯火の前に玻璃鏡を懸て火光を鏡の後に發すること同理に御座候、故に昏にハ西方に現し、晨には東方に見え申候、是日彗星之後にあるか故之事に御座候、又其光を受るの斜直により光芒長短御座候、古彗星を妖星と申候ハ常に見馴不申候之事に御座候、常に見申候月之盈虧は異と不申候^而、偶見え申候彗星を奇と仕候^二被存候、又除旧布新と申臆説、五星化彗、彗化五星と申説を古より申伝へて、水旱兵荒疾病之兆を申候得共、是其理を尽さざる故かと存申候、此余に考も無御座候、猶宜敷御考察之段伏^而奉願上候、以上

松浦浩靜謹上

12. 安政五年八月十三日彗星位置図

〔作成年代〕安政五年戊午八月十三日 〔差出〕東寺松浦〔松浦浩静〕・伊藤〔伊藤信興〕 〔宛先〕—— 〔形態〕 縦紙
〔数量〕 1 〔法量〕 縦27.5×横39.5cm 〔備考〕《八一―二―五》／如意嶽上空の彗星と北斗・北極星が描かれる
〔翻刻〕（図略）

右今晚未明所窺光芒二三尺、

星体著明^可、其色淡黄矣

安政五年戊午

八月十三日

東寺

松浦

伊藤

13. 毎日垂球行記

〔作成年代〕安政六年己未六月廿九日午中〜八月廿五日 〔差出〕—— 〔宛先〕—— 〔形態〕 仮綴 〔数量〕 1
〔法量〕 縦7.0×横20.1cm 〔備考〕《八一―三》／罫線は省略／七月四日の数値は貼紙訂正あり
〔翻刻〕

毎日垂球行記

安政六年己未

六月

從廿九日午中

十四	十三	十二	十一日	十日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日	二日	一日	七月	卅日	廿九日	
四	五	七	九	十	二	四	五	七	九	一	二	四	六		七	九	万
二	九	六	二	九	六	三	九	六	三	〇	七	二	〇		八	五	千
四	九	〇	六	五	三	三	四	七	六	四	七	〇	〇		一	六	百
十	九	八	〇	八	二	四	五	五	十	七	六	七	〇		四	〇	十

二日	一日	八月	廿九	廿八	廿七	廿六	廿五	廿四	廿三	廿二	廿一	廿日	十九	十八	十七	十六	十五
五	七		九	十	二	一	五	七	九	九	二	四	六	七	九	十	二
七	四		〇	七	四	一	六	三	一	八	四	二	二	五	二	八	五
七	四		七	五	三	二	二	二	九	八	二	〇	七	〇	一	〇	四
三	〇		九	八	七	七	九	十	三	十	二	六	二	六	九	五	九

日影改

十四日	十三日	十二日	十一日	十日	九日	八日	七日	六日	五日	四日	三日
四	六	八	十	二	四	五	七	九	十	二	四
四	一	八	五	三	九	六	三	九	六	三	〇
六	〇	三	〇	五	五	四	二	七	七	八	三
十	七	六	二	二	九	〇	二	七	三	七	三

十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	廿日	廿一日	廿二日	廿三日	廿四日	廿五日
二	一	九	一	六	四	二	一	九	一	六
七	一	四	一	一	四	八	一	一	〇	九
五	六	一	マ	六	七	五	四	三	九	四
六	五	二	マ	八	十	十	七	五	五	四

14. 彗星測量記并垂球行数法

〈作成年代〉（安政五年）九月一日〜十七日 〈差出〉（東寺 伊藤） 〈宛先〉 — 〈形態〉 罫紙綴 〈数量〉 1

〈法量〉 縦24・0×横16・8cm 〈備考〉 《八―四》／6丁／版心に「東寺伊藤」とある黒十行罫紙の裏面使用、6丁目は

堅切紙使用／揺光・大角・彗星それぞれの高高度（北極高度内減台高度余・正玄・巾） 巨子高度（正玄・巾）等記入表、九月三日〜十七日の昏時分・午後刻分・一日之球行・午後之行数・昏時球行数記入表、一日の球行数・午後刻分・

昏時の球行数の求め方と実例、八月廿二日夕の彗星測図が綴られたもの、一部欄外記載・朱書あり

〔翻刻〕（表略）

推毎日昏時 御垂球之行数

求一日之球行

置本日正午之行、加十万内減前日正午之行、得一日之行

求午後刻分

置本日昏時分〔別紙記之〕、内減五十刻余為午後刻分

求昏時球行数

置午後刻分以一日之行除之、得午後之行数、加本日正午之行則得之、〔但以百刻為一位〕

一今日正午之行五万^(アキマヤ) 十^ニ万ヲ加へ、其内前日正午ノ行五万四千零六十ヲ引候へハ残り九万九千^(アキマヤ) トナル、名

之為一日之行〔即昨日午時ヨリ今日午時マテノ全一日ノ球行数^ニ御座候〕

一今日ノ昏分七十六刻三十一分十三秒ノ内、五十刻ヲ引候へハ残り二十六三十一分十三秒トナル、名之為午後刻分

〔即今日正午昏時迄ノ刻分^ニ御座候〕

一午後刻分二十六刻三十一分十三秒ヲ置キ、一日之行九万^(アキマヤ) 千^(アキマヤ) 二^{ワリ}テ除候へハ午後之^{ワリ}行数二万六千^(アキマヤ) ト相

成候、ソレへ今日正午之行五万^(アキマヤ) ヲ加へ候へハ八万^(アキマヤ) ト相成候、是即チ今日昏時之御球行数^ニ御座候

推毎日昏時 御垂球之行数法

求一日之球行

置本日正午之行、加十方内減前日正午之球行、得一日之球行

求午後刻分

置本日昏時分「別紙記之」、内減五十刻余為午後刻分

求昏時之球行

置午後刻分与一日之球行相乗得数加本日正午之球行得昏時之球行、「但以百刻為一位」

一今日 正午之球行五万四千零六十二万ヲ加へ、其内ニテ前日正午之球行五万四千二百ヲ引候へハ、残り九万九千八百六十ト成申候、之ヲ一日之球行ト名付申候「是即昨日ノ正午ヨリ今日ノ正午マテ全一日ノ球行ニ御座候」

一今日ノ昏分七十六刻三十八分五十四秒ノ内、五十刻ヲ引キ、残り二十六刻三十八分五十四秒、コレヲ午後刻分ト名付申候「是即今日ノ正午ヨリ今日ノ昏時迄ノ刻分ニ御座候」

一午後刻分二十六刻三十八分五十四秒ニ、一日之球行九万九千八百六十ヲ乗候へハ「但百刻ノ処ヲ一ノ位ト定申候」、二万六千三百五十ト成申候「之ヲ午後之球行ト名付、即チ今日ノ正午ヨリ昏時迄ノ球行ニ御座候」、コレへ今日正午之球行五万四千零六十ヲ加へハ、今日昏時之球行八万零四百一十ト相成申候

〔図略〕

八月廿二日夕所窺

距北極 五十六度許

赤道寿星 十度許

光芒 十五六度 西埽 常陳第二星
 所指紫宮御女・天柱之辺

15. 安政五年戊午八月（彗星測量記）

〔作成年代〕安政五年戊午八月 〔差出〕——〔宛先〕——〔形態〕横綴 〔数量〕1 〔法量〕縦12.2×横34.1cm

〔備考〕《八―五》/5丁/掛紙3点あり

〔翻刻〕

昏一

安政五年戊午八月

△十四日暁

明六時測

天狼 地上三十四度

方位卯南六十四度

彗星 地上十一度

方位卯北三十五度

△十五日暁

明六時前測 〔天狼地上三十四度之節彗測之所、浮雲

有之不見不能彗測〕

天狼 地上三十度

方位卯南六十度

彗 地上九度

方位卯北三十六度五十分

△十六日暁 雨天 不得測

△十七日暁 曇天 不得測

△十八日暁 雲氣覆不得測

〔雲間ヨリ鳥渡見候得共直失彗体、仍不測〕

△十九日暁 雨天 不得測

△廿日暁 曇天 不得測

△廿一日暁 同断

△廿二日暁 曇天

^(掛紙1)「△廿三日暁 測

天狼 地上三十八度五十分

午東十五度五十分

彗 地上四度五十分

卯北三十五度

軒轅_{南大星} 地上二十八度五十分

卯南五度

△廿四日暁 不測

△廿五日暁

△廿六日暁

△廿七日暁

廿八日暁

右雨氣・雲氣等不測

廿九日六時 彗休窺 不見

安政五年戊午八月 「自今八月十三日至九月十七日於權

殿測量」

△十三日暮六時二分測

揺光 地上三十四度

方位西北四十一度

彗星 地上九度

方位西北四十度

彗

入没時 六半頃

方位西北四十三度

△十四日暮

^(掛紙2)「揺光雲氣不見 暫而揺光測 地上三十三度

方位西北四十一

度七十分

至衡 地上二十八度七十分

方位西北五十二度

彗星 地上九度

方位西北三十九度

彗

入没時

雲氣不測

△十五日暮雨天不得測

△十六日暮

揺光 地上三十四度五十分

方位西北四十一度

彗 地上十二度

方位西北三十七度

△十七日暮測

大角 地上廿七度七十分

西北六度

彗 地上十五度

西北三十六度

十七日測 東寺 松浦・伊藤兩人測

揺光 地上卅四度五十分

西北四十一度ナリ
戊北十一度

彗 地上十二度

西北三十六度ナリ
戊北六度

△十八日夕測

大角 地上廿六度八十分

西北六度五十分

彗 地上十三度

西北三十五度

△十九日夕雲靄不測

△廿日夕雲靄不測

△廿一日夕雲靄不測

△廿二日夕測六時也

大角 地上廿五度七十分

西北七度五十分

彗 地上十六度七十分

西北廿九度二十分

揺光 地上卅二度五十分

西北四十二度

牛宿南中

彗入没 地上四度

西北卅八度

光芒凡十三度計

常陳犯

△廿三日昏測

〔^{掛帳}〕大角 彗 地上十八度三十分

西北二十七度

彗 大角 地上二十六度二十分

西北七度

揺光 地上三十三度七十分

西北四十二度ナリ 戌北十一度

△廿四日昏測

彗 地上廿度

西北卅度

大角 地上三十六度二十分

西北七度

揺光 地上三十三度

西北四十二度

○彗入没雲氣不測

廿五日

雲氣不測

廿六日

廿七日昏測

彗 地上十七度

西北十八度

大角 地上廿四度

西北八度五十分

揺光 地上十九度卅二度三十分

西北四十二度

入没不測

△廿八日雲氣不測

△廿九日昏測

彗 地上二十度五十分

西北十一度

大角 地上二十三度

西北九度五十分

揺光 地上二十八度八十分

西北四十三度

彗

入没測

彗 地上三度

西北二十度

大角 地上三度

西北二十二度弱

△卅日昏測

彗 地上廿度二十分

西北八度

地上十八度半

西北九度

松浦測後測

後測松浦

大角 地上廿度

西北十度五十分

地上十七度半

西北十三度半

後測同上

搖光 地上廿八度十分

西北四十三度

地上廿七度

戊十三度半

卅日

入没彗

地上二度

廿七度半

西北十五度

大角

地上二度

西北二十二度

招搖

地上十度半

西北二十四度

△九月一日昏測

彗 地上二十三度二十分

西北五度

地上十四度五十分

西北八度

後測

大角 地上二十一度

西北十一度五十分

地上十三度

西北十四度八十分

招搖 地上三十度五十分

西北十八度

地上廿二度五十分

西北十八度

搖光 地上二十八度六十分

西北四十六度

地上十三度

西北四十五度五十分

入没不測

△二日初昏測 光芒貫索北抃

彗 地上廿五度五十分

西南二度五十分

球行昏時八万〇三百七十

東寺来

大角 地上二十二度
西北十度五十分

△三月初昏 球行八万〇六百四十 窺天星不見

八万〇五百七十之測

○暫而又測

彗 地上廿五度 彗 地上廿二度八十分

西北五度二十分 西南四度五十分

大角 地上廿二度二十分 大角 地上二十度

西北十度二十分 西北十二度

招搖 地上三十二度二十分 招搖 地上二十九度五十分

西北十四度 西北十五度九十分

搖光 地上三十二度二十分 搖光 地上二十八度

西北四十五度八十分 西北四十四度五十分

△四月初昏 球行八万一千四百六十之時雲氣不見、

八万三千〇百〇十之測

再測



彗 地上二十九度 地上十七度

西南六度 西南五度

三測

大角 地上十七度廿分 地上十五度九十分 地上十四度

西北十四度 西北十五度 西北十五度九十分

招搖 地上二十四度三十分 不測

西北十八度

搖光 地上 雲氣不測 地上二十四度五十分

西北 西北四十七度

今四日昏、芒氣粗直二見

△五日雨天

△六日昏 球行八万三千二百一十 東寺来

彗 地上廿二度二十分

西南十八度八十分 改十九度八十分

大角 地上十八度五十分

西北十二度 改十一度

招搖 不測

搖光 地上二十七度七十分

西北四十四度三十分 改四十三度卅分

△七日雨天

△八日曇天 昏時八万四千二百〇十

△九日 昏時八万五千三百四十之時最早遅ク星体惣面

見ユ、昏時ハ過歟、則前之球行八万九百二十

之時測

招揺 地上二十五度

西北十一度八十分

西北十五度十分

彗 地上十八度二十分

西南三十二度

揺光 地上二十五度

西北四十三度

大角 地上十五度二十分

△十日曇天 昏時八万四千三百八十

△十一日 昏時八万五千〇百一十測 東寺

彗 地上十八度 二測 地上十四度二十分

西南卅七度 西南卅四度五十分

三測 地上十二度二十分

西南三十二度

心宿 地上十一度 不測

西南四十度五十分

不測

貫索 地上三十三度

不測

不測

大星 西北十二度

大角 不測 地上十二度五十分

地上十二度

招搖 不測

酉北十六度

不測

酉北十八度
地上二十三度

搖光 不測

地上二十五度

酉北三十三度

酉四十七度

△十二日昏始見留即測

昏時球行八万五千五百九十

測二度目

擘 地上十四度二十分

地上十三度七十分

△十三日曇天不測 昏時垂球行數八万六千一百七十

西南三十八度

西南三十七度

△十四日昏時八万三千三百九十測 東寺來

大角 地上十一度六十分

地上十一度二十分

擘 地上十四度

西北十七度

西北十七度十分

西南四十四度

招搖 地上二十二度

地上二十一度

大角 地上十二度

西北二十度八十分

西北二十度

西北十六度九十分

搖光 地上二十二度九十分

不測

招搖 地上廿一度五十分

西北五十三度

西北二十度

貫索 不測

地上三十度

搖光 地上廿二度五十分

天皇

西北十九度

西北四十七度

心宿 地上九度

地上七度五十分

貫索 不測

西北四十度

西北三十八度九十分

心宿 地上九度

西南四十度

△十五日昏八万一千八百三十測 東寺来

彗 地上十四度

西南四十八度

大角 地上十四度五十分

西北十五度

招搖 地上二十三度七十分

西北十八度五十分

搖光 地上二十四度五十分

西北四十六度

心宿 地上十度六十分

西南四十二度

△十六日雨天不測

△十八日 球八万四千九百二十

七十八刻七十三分八十二秒

彗 地上五度

午西四十八度十分

箕宿 地上十〇度三十分

△十七日球行八万四千九百二十測 伊東来

彗 地上十二度二十分

西南五十一度〇

大角 地上十二度

西北十六度二十分

招搖 不測

搖光 地上二十四度三十分

西北四十六度二十分

貫索 地上三十二度

大星 西北十三度二十分

心宿 地上九度

西南四十〇度三十分

自今十八日於露台測量

八万五千五百二十

地上五度九十分

西南五十度五十分

地上九度四十分

午西三十五度四十分

西南五十六度四十分

△十九日

初測八万三千二百十四

二測八万四千

六時五分測

七十七刻六十四分三十九抄

七十八刻四十三分三十六抄

彗 地上八度

地上六度五十分

地上四度五十分

午西四十度

午西四十二度

午西四十四度

心 地上六度

地上二度五十分

入没

午西五十六度

午西五十七度五十分

箕 地上十六度

地上十二度

地上十度九十分

午西三十一度五十分

午西三十二度五十分

午西卅四度九十分

二十日曇天

(掛紙1)

廿一日曇天 晴不見

「△十七日曉 鞠負測

廿二日曇天

天狼 地上 不測

廿三日曇天

方位卯南六十度

廿四日箕宿之下曇

彗 地上六度五十分

廿五日

方位卯北四十四度

廿六日全消散

」

(掛紙2)

「十四日暮六時測

揺光 地上三十五度五十分

方位西北四十一度

彗 地上十一度

方位西北三十八度

(掛紙3)

「廿三日彗入没測

大角 地上八度五十分

方位西北十八度五十分

彗 地上四度七十分

方位西北三十八度

揺光 地上十九度七十分

方位西北五十三度

16. 暮六時五分之刻分書上

〈作成年代〉(安政五年八月) 十八日〜二十六日 〈差出〉 | 〈宛先〉 | 〈形態〉切紙 〈数量〉 1

〈法量〉縦13.9×横39.8cm 〈備考〉《八一六》/秒部分は二行割表記

〔翻刻〕

暮六時五分之刻分

刻 分 秒

十八日 七九 三七 三八

十九日 七九 三一 七六

二十日 七九 二六 一八

二十一日 七九 二〇 六五

二十二日 七九 一五 一七

二十三日 七九 〇九 七三

二十四日 七九 〇四 三四

二十五日 七八 九九 〇〇

二十六日 七八 九三 七二

右之通奉存候、以上

17. 彗星出現につき二度目勘文控

〔作成年代〕安政五年戊午八月十六日 〔差出〕（土御門晴雄）〔宛先〕（議奏）〔形態〕切紙 〔數量〕1
 〔法量〕縦16. 1×横59. 0 cm 〔備考〕《八一七・八一三》⁸⁾／端裏書「二度 安政五年戊午八月十六日差出議奏」／掛紙
 2枚あり、掛紙1は掛紙2の下／本史料群2の勘草か、文中のカギ形は清書勘文の改行を示すもの

〔翻刻〕

從今月上旬頃晨昏彗星出現、於「翼宿之度太微垣之屬星常陳」星之側、光芒北指、其長二三尺計、「戌刻前没乾隅、寅刻後出艮隅」是近北極故入地之淺而周天之速也、「上旬來夜々陰晴不定屢難測」得、十一日已後所見聊東進去翼宿「移軫宿、今雖近紫微・太微之兩」垣、無犯入者強無其恐歟、天文「大成曰彗者除旧布新余殃」不尽為大旱飢暴疾疫長「大見久災深小短見速災」淺云々、今年春來氣候不順「陰陽錯行風雨不時故、上陽」之氣凝結而成彗星者也、但旧「史古籍拳其占者許多而或」為兵革喪亡、水火・地震・流疫「等之徵、然異星出現之事」和漢每度而其応徵有「無」者蓋因治乱之時世無定例「者也、今度出現候之彗星可 有」全時候不調之變歟、益垂示 聖徳訓導 被加

宸慎之 叡慮被 崇敬 神明

〔掛紙1〕「寬仁及衆物之時何亦有他變異乎、仍謹所勘申也」

〔掛紙2〕「何有得凶禍乎」

〔掛紙2〕「今也聖徳及衆物之時、亦何有他變異乎益被加 宸慎被 崇敬 神明者天星可消散矣、仍謹所勘申也」

18. 午中・昏時球行記

〔作成年代〕（安政五年九月）一日午中〜四日昏時 〔差出〕 | 〔宛先〕 | 〔形態〕切紙 〔数量〕 1

〔法量〕縦16.0×横19.5cm 〔備考〕《八一八》

〔翻刻〕

一日

午中 五万四千二百

正午 五万四千七百三十
三日

也、右行数ヲ三日ノ

正午ノ数江加エル、昏時

昏時 八万〇六百四十

八万〇六百四十也

二日

正午 五万四千四百六十

行数

四日

二日

昏時 八万〇三百七十

二万五千九百十

四日昏時分

八万〇千九百五十九一

二日正午ヨリ昏時迄

八万一千二百九十五五

三日

ノ行数二万五千九百十

19. 午中・昏時球行記

〔作成年代〕（安政五年九月）四日午中〜六日昏時 〔差出〕 | 〔宛先〕 | 〔形態〕切紙 〔数量〕 1

〔法量〕縦16.0×横22.1cm 〔備考〕《八一九》

〔翻刻〕

四日午中

〔二日ヨリ四日迄ノ行

五万五千一百四十

トハ余程違ヒ申候〕

行十〇万〇九百三十

五日午中

五万五千九百六十

行十〇万〇千八百二十

六日午中

五万六千八百九十

20. 午中・昏時球行記

〔作成年代〕（安政五年九月）五日午中〜六日昏時

〔法量〕縦16.0×横13.2cm

〔備考〕《八一〇》

〔翻刻〕

五日午中

五万五千四百五十

昏時分

八万一千七百〇十

右両行平均ニ致シ

十〇万〇千八百七十五

六日昏時分

八万三千二百一十

〔宛先〕――〔形態〕切紙

〔数量〕1

六日午中

五万五千七百六十

昏時分

八万一千九百四十

21. 安政五年午八月彗星之測

〔作成年代〕安政五年午八月十四日～二十三日 〔差出〕東寺 兩人 〔宛先〕— 〔形態〕切紙 〔数量〕1

〔法量〕縦17.9×横24.2cm 〔備考〕《八一—二》

〔翻刻〕

安政五年^午八月彗星之測 東寺兩人

赤道宿度

距北極

距赤道北

十四日

翼十度。

五十四度^五

三十五度^五

十五日 曇

十六日

十三度^四

五十四度^八

三十五度^二

十七日

十五度。

五十五度。

三十五度。

十八日

十六度^七

五十五度^二

三十四度^八

十九日 曇

二十日 曇

二十一日 曇

二十二日

軫五度^三

五十五度^八

三十四度^二

二十三日

七度

五十六度。

三十四度

22. 昏刻分改算書上

〔作成年代〕(安政五年) 九月十五日 〔差出〕伊藤信興・松浦浩静 〔宛先〕—— 〔形態〕切紙 〔数量〕1
 〔法量〕縦17.6×横24.3cm 〔備考〕《八一―二》

〔翻刻〕

昏刻分

刻 分 秒

十四日 七五 五二 三一
 十五日 七五 四五 三八
 十六日 七五 三八 四九
 十七日 七五 三一 六五

十八日 七五 二四 八五
 十九日 七五 一八 一一
 二十日 七五 一一 四二

右改算仕候処如此御座候、以上

九月十五日

伊藤信興
 松浦浩静

23. 彗星所在図

〔作成年代〕(安政五年) 〔差出〕—— 〔宛先〕—— 〔形態〕切紙 〔数量〕1 〔法量〕縦16.6×横18.6cm
 〔備考〕《八一―一三》/北斗と彗星が描かれ、揺光から彗星までの度数が書き込まれる/方位「北」表記あり

24. 彗星所在図

〔作成年代〕(安政五年八月) 十三日・十七日・十八日・廿二日 〔差出〕—— 〔宛先〕—— 〔形態〕切紙 〔数量〕1
 〔法量〕縦15.9×横19.3cm 〔備考〕《八一―一四》/十三日・十七日は揺光から彗星までの、十八日は大学から、廿二

日は揺光・大学⁽⁹⁾それぞれからの度数を書いたもの。

25. 彗星実測

〔作成年代〕安政五年午八月廿四日 〔差出〕松浦浩静・伊藤信興 〔宛先〕— 〔形態〕切紙 〔数量〕1

〔法量〕縦17.9×横24.2cm 〔備考〕《八一—一五》

〔翻刻〕

彗星実測

十四日晨

赤道 翼十度

距北極五十四度

廿三日昏

赤道 軫七度

距北極五十六度

右十日之間

東行十六度

南行一度半

毎日東南平行一度七十分許

右之通御座候、以上

安政五年午八月廿四日

松浦浩静
伊藤信興

26. 球行記 正午数

〔作成年代〕（安政五年）九月朔日〜二十三日 〔差出〕— 〔宛先〕— 〔形態〕横綴 〔数量〕1

〔法量〕縦12.3×横34.0cm 〔備考〕《八一—一六》

〔翻刻〕

球行記

正午数

九月朔日晴

五万四千二百〇十

二日

五万四千四百六十

三日

五万四千七百三十

四日

五万五千一百四十

五日

曇 〔大和算定

五日正午 五万五千四百五十

六日晴

〔大和算定

五万六千八百九十 五万五千七百六十

七日

雨天 〔大和算定

八日

五万八千〇百三十

九日

五万八千二百三十

十日

五万八千四百六十

十一日

五万九千一百一十

十二日曇天

〔大和算定

十二日正午 五万九千七百六十

十三日曇天

〔同断

正午 六万〇千四百一十

十四日

五万七千七百一十

十五日

五万六千六百五十

十六日

五万五千九百九十

十七日

五万六千二百四十

十八日

五万六千〇百七十

十九日

曇天

五万五百七十

（アキマ）

ニ而麿有之令臥

二十日

五万六千四百二十

二十一日

五万七〇千百一十

二十二日

五万七千六百 曇天

二十三日

五万七千九百二十

27. 午中・昏時球行記

〔作成年代〕（安政五年）七日午中〜十五日昏時分

〔法量〕縦16・2×横45・7cm 〔備考〕《八―一七》

〔翻刻〕

七日午中

五万六千〇百七十

昏時分

八万二千三百二十

八日

〔差出〕

―

〔宛先〕

―

〔形態〕切紙

〔数量〕

1

昏時分

八万四千二百〇十五

九日午中

五万九千一百七十

昏時分

八万五千三百四十

十日

昏時分

八万四千三百八十

十一日

昏時分

八万五千〇百一十

十二日午前

五万九千七百六十

昏時分

八万五千五百九十

十三日午前

六万〇千四百一十

昏時分

八万六千一百七十

十四日

昏時分

八万三千三百九十

十五日昏時分

八万一千八百三十

28. 正午・昏時・午後刻分球行記

〔作成年代〕（安政五年九月）一日正午～四日午後刻分〔差出〕―〔宛先〕―〔形態〕切紙〔数量〕1

〔法量〕縦16.0×横53.0cm〔備考〕《八一―一八》

〔翻刻〕

一日正午

五万四千二百

一日正午ヨリ二日正午迄行数十〇万〇千二百六十

二日正午

五万四千四百六十

二日正午ヨリ三日正午迄行数十〇万〇千二百七十

三日正午

五万四千七百三十

三日正午ヨリ四日正午迄行数十〇万〇千四百十

四日正午

五万五千〇百四十

右之通日々行数不同、御座候故、三日ノ

行数ヲ平均仕候

一日之球行

十〇万〇千三百一十三三三三

三日昏時

七万六千三百一十一三

四日昏時

七万六千二百三十七五

29. 昏時・六時五分時分球行記

〔作成年代〕（安政五年八月）十六日昏時分〜二十三日六時五分時分 〔差出〕― 〔宛先〕― 〔形態〕切紙

〔数量〕1 〔法量〕縦16・0×横43・9 cm 〔備考〕《八―一九》

三日午後刻分

二万六千三百一十三

四日午後刻分

二万六千二百三十七五

三日四日

一日之球行

十〇万〇千三百一十三三三三

三日午後之行数

二万六千二百二十九一

四日午後之行数

二万六千一百五十五五

三日昏時分

〔翻刻〕

十六日

昏時分

八万一千二百一十六

十七日

昏時分

八万一千六百二十

十八日

昏時分

八万一千二百八十

十九日

昏時分

八万〇千六百七十五

六時五分時分

八万四千七百九十三

二十日

六時五分時分

八万五千七百八十四

二十一日

六時五分時分

八万六千三百九十

二十二日

午中

五万七千六百

六時五分時分

八万六千九百二十

二十三日

六時五分時分

八万七千一百一十

30. 球行数比較記

〔作成年代〕(安政五年九月) 六日〜十日 〔差出〕 | 〔宛先〕 | 〔形態〕切紙 〔数量〕 1

〔法量〕 縦14.8×横13.6cm 〔備考〕 《八一二〇》／裏面上部に糊貼痕あり

〔翻刻〕

六日ヨリ

七日 行十万一千百四十

八日迄

八日ヨリ

九日 行十万〇千四百三十

十日迄

右兩行違ひ七百差_三相成、余り之違ひ_二御座候

31. 彗星考

〔作成年代〕 安政五年午八月十七日 〔差出〕 御門人 伊藤信興 〔宛先〕 — 〔形態〕 豎紙 〔数量〕 1

〔法量〕 縦15.7×横47.8cm 〔備考〕 《八一二一》

〔翻刻〕

八月上旬彗星出、昏見西北、晨見東北、或曰七日始見、然十三日暁_小始窺之星体顯然、其色如黄、芒氣淡薄而長二三尺、其居在下台之辺所指北極之南二度許、然北斗橫其前而其首

尾与彗為三角形、夕所見亦如此、十四日暁亦猶不移、然而斗首与中台亦為三角形、蓋其所指極南五度許者是隨日躔也、已十五日早晚共有雲氣、十六日暁亦不能窺、夕窺之南移六七度、然雲氣旁午不見恆星故不詳其所、十七日暁又有雲氣不可窺之、謹按晋書云妖星一曰彗星、所謂掃星本類末類彗小者数寸長或竟天見則兵起大水主婦除旧布新云々、按彗体無光伝日而為光故、夕見則東指、晨見則西指、在日南北皆隨日光而指頓挫、其芒或長或短、光芒所及則為灾云々、可見彗之形状漢人既言之矣、又何借彼洋夷之言乎、洋夷論星体紛紜聚訟均是係于臆造矣、然其云為緯星之類者_小亦

取之、其隱見之所以殊于五星者以行道之異也、是故出則万国皆可見而非一処独見者也、以万国皆見者說一国之妖祥乎誣天之甚者也、故古聖人唯觀上下之通塞以知国之盛衰矣、嗚呼今也、堂堂 天庠德沢溢四海文教内備武衛外奮至于四裔左衽之徒孰有不敬戴之崇奉之者哉、真是 神明呵護魑魅屏跡之時也、彗彼小星亦奚能焉哉、小子所考如此、誠恐誠惶伏祈裁斷謹言

御門人

安政五年^午八月十七日

伊藤信興

32. 勘文留

〔作成年代〕文久元年五月、文久三年十二月四日陰〔差出〕晴雄「土御門晴雄」〔宛先〕——〔形態〕豎綴
〔數量〕1 〔法量〕縱24.6×橫17.5cm 〔備考〕《八一二三》／13丁

〔翻刻〕

【〇】

此頃昏後西北之天彗星出現候、過日來陰晴不定候故精不得窺候、漸昨夜浮雲相散窺得候所、宿度者井宿之度有之候、戌刻後彗體雖没山頭、光芒竟天不尽、曉東北之天出候、併未得密測候間、猶測量之上言上候得共、先此段申上置候事

【〇】

從今月下旬彗星西北之天出現、連宵窺所雲霧不得測、去廿四日昏漸雲氣散窺候処、在于井宿十四度、光芒竟天終夜不隱、廿五夜鬼宿一度、廿六日夜柳宿四度半、廿七日夜張宿九度々東南座移、凡彗星之出乎和漢不違枚筭、是皆為兵革喪亡・水火・地震・流疫等之徵矣、按旧史古籍至諸儒及方家者流雖其說紛々不同、或有庇或無徵、元來彗星者火氣挾土上升結体者^二、氣候依不

整成者也、是全時候之變而所以異星之出現歟、今雖
無人紫微垣内不可不畏焉夫消災致祥不如祭祀除厄保命
唯在祈恩也、官議宜有祈禳以致万幸矣、謹所勘申也

文久元年五月廿八日

晴雄

【〇】

去五月下旬以来出現候彗星、從今月上旬之頃夜々減却
候、去九日夜者殊薄有若無候、其後連夜陰晴不定、且
月光增長候時候間精難得窺候得共、此趣^三者弥消散
候、此段言上候也

文久元年七月十三日

晴雄

暗劍殺之事

五行中以土為最重土氣旺殺之所發恰如劍殺物因名暗劍
殺之、為義暗中有殺代之意也、故一切土中破動造作移
徙之類忌之、又吉神多旋合之時者有用無妨事

七月十六日

晴雄

御着帯の日時

今月廿日きとのミ時たつ

文久元年九月十四日

はれ雄

御着帯の吉方

辛「とりいぬの間に向はるへし」

文久元年九月十四日

はれ雄

御臨産吉方之事

今二日より四日まで九月中

庚申酉の間なり

今月五日より十一月五日まで

十月節并中

辛酉戌の間なり

母屋廂之事

今月三日・四日・十三日・十四日・廿三日

廿四日・十一月四日・五日

右の日は母屋を避らるへし

文久元年十月二日

はれ雄

今月今日 姫宮御誕生雑々日時

御ちつけの日時

今月今日ミつとのい

時今

御ほその御を裁らるへき日時

今月今日ミつとのい

時今

御湯殿の具を造らるへき日時

今月今日ミつとのい 時今

御うふ湯めさるへき日時

今月今日ミつとのい 時今

但しうたつの間の流水を汲るへし

御うふきぬめさるへき日時

今月十五日かのへむま 時むま

但し白色の絹をめさるへし

御うふかミたれらるへき日時

今月十五日かのへむま 時ひつし

御えなおさめらるへき日時

今月十二日ひのとう 時ミ

但しうたつの間の方へおさめらるへし

文久元年十月八日 はれ雄

扱申可被始行辛酉御祈五大虚空藏法日時

来月十一日甲子 時酉

文久元年十一月廿二日陰

扱申可被始行 御修法日時

来月十一日甲子 時酉

文久元年十一月廿二日陰

扱申可被行 内侍所臨時 御神楽日時

今月廿七日庚辰 時酉

文久元年十二月四日陰

扱申可有 皇太神宮御造替山口祭日時

来月十五日丁酉 時辰

文久二年二月十二日陰

扱申可有 豊受太神宮御造替山口祭日時

来月十五日丁酉 時午

文久二年二月十二日陰

勘申

『○』 変異卜之事

今年正月元日 春日社第四社神鏡落損

同年三月四日 同社第三社神鏡落

右兩条、謹探神筮遇天水訟不変卦夫以訟之卦象、考之上卦之乾為鏡下卦之坎為陷為降、是則神鏡降落之象乎、易曰天水違行訟云々、訟違忤也、又争弁也、蓋乾升坎降天西行坎東行又上剛健以制其下下儉剛以忤、其上皆

背戾之象、上下唯在警戒耳然以不變卦再考之、不變者無變異也、是終無事之象乎

右就卦象雖述之、神明幽玄之事不可測、吉凶豈敢輕定之哉、因此頃於社頭被行神樂且懇祈謝焉、然則神靈安穩災自消矣、仍謹所勘申如件

文久二年三月十九日陰

○今度丑寅方^江御築地新被建出候^{二付}、鬼門方^{二而}御築地角御元方通被除候哉、亦者御凶之通不被除候方可宜哉、御尋之趣謹承候、元來 王城之鬼門者比叡之靈山守護之義^二有之候間、於 御廓内不及鬼門之除地義^下存候、御築地角被虧候義、於本說者一向無之存候得共、併御元方通被 仰付候者御無難可被為在存候、且臣下帝^{二而}除地之法夫々之著別^茂有之義^二候事

七月八日

晴雄

○此頃每夜紫微垣内彗星出現候得共、甚微少^{二而}慥成義難見定、且雲氣往来夜々不得測量、漸昨夜窺得候處、弥彗星之趣候、芒氣凡一尺計有之候、星体近北極之故無地入^而終夜出現候、猶測考之上可申上候得共、先出

現之義言上候事

七月廿八日

晴雄

○從去月下旬彗星出現、于紫微垣内不日而出垣外、光芒漸長矣、天文大成曰客星者非常之星、天皇大帝之使以告咎罰者也、又曰中垣紫微天子之大内也云々、当年出現之異星初見雖出垣内不日而移座于垣外、其恐鮮歟、近年彗星度々出現、必雖不為災異之凶非天變所宜致謹慎歟、仰冀專加戒慎厚施恩沢崇敬虔誠有禱于上下之神祇、則可以免其凶禍矣、仍謹勘申如件

八月三日

晴雄

○從去月下旬出現候彗星、夜々座移至此頃者心宿之度有之甚微少候、此趣^{二而}者今暫經日數候者全消散可仕存候、此段言上候也

八月廿二日

晴雄

扱申可有 春日社一社奉幣日時

今月五日癸丑 時已

文久二年十一月三日陰

扱申可被行 賀茂臨時祭日時

今月廿八日丙子 時卯

文久二年十一月七日陰

扱申可被行 内侍所臨時 御神樂日時

来月廿一日己亥 時戌

文久二年十一月廿二日陰

扱申可有 皇太神宮御造替木作始日時

来月十五日辛酉 時辰

十六日壬戌 時巳

文久三年二月十一日陰

扱申可有 豊受太神宮御造替木作始日時

来月十五日辛酉 時巳

十六日壬戌 時午

文久三年二月十一日陰

扱申可有 神武帝山陵使発遣日時

今月廿二日戊戌 時辰

文久三年二月十八日陰

扱申可被告 神武帝山陵日時

今月廿四日庚子 時午

文久三年二月十八日陰

扱申可被奉遣公卿 勅使於伊勢 太神宮日時

今月四日庚戌 時巳

文久三年三月一日陰

扱申可被告 宣命於伊勢 太神宮日時

今月八日甲寅 時辰

文久三年三月一日陰

扱申可被發遣 石清水社 賀茂下上社 宣命使日時

今月八日甲寅 時寅

文久三年三月一日陰

扱申可有 賀茂下上社 行幸日時

今月十一日丁巳 時卯

文久三年三月三日陰

扱申可有 神武帝 神功皇后等山陵使発遣日時

今月廿四日庚午 時午

文久三年三月廿一日陰

扱申可被告 神武帝山陵日時

今月廿八日甲戌 時巳

文久三年三月廿一日陰

扱申可被告 神功皇后山陵日時

今月廿九日乙亥 時辰

文久三年三月廿一日陰

扱申可有 石清水社 行幸日時

今月十一日丁亥 時卯

文久三年四月三日陰

『○』扱申可有新鑄錢 宣下陣儀日時

今月廿五日辛丑 時巳

文久三年四月十八日陰

扱申可有 詔書覆奏日時

今月廿八日甲辰 時巳

文久三年四月十八日陰

扱申可有諸山陵 御拜日時

おわりに

國學院大學図書館所蔵「土御門家記録」の近世文書群について、前稿および本稿にて解題・翻刻を行った。他機関に所蔵されている土御門家関連資料とあわせみること、江戸時代における土御門家の動向ならびに当該期の天文測

今月八日壬午 時巳

文久三年八月二日陰

『○』扱申年号勘者 宣下日時

来月十五日丁亥 時辰

文久三年十一月十七日陰

『○』扱申革命勘者 宣下日時

来月十日壬午 時辰

文久三年十一月十七日陰

『○』扱申可有改元日時

来年二月廿日辛卯 時巳

文久三年十一月十七日陰

扱申可被行 内侍所臨時 御神楽日時

今月廿二日甲午 時酉

文久三年十二月四日陰

量技術と知識に関して、さらに新たな知見が得られるものと考える。

註

- (1) 高見澤美紀「國學院大學図書館所蔵『土御門家記録』所収近世文書の解題と翻刻」(國學院大學校史・學術資産研究) 第十号、平成三十年
- (2) 大崎正次編『近世日本天文学史料』(原書房、平成六年)、日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本天文学史 新訂版』(財団法人野間科学医学研究資料館、昭和五四年)、渡辺敏夫編『近世日本天文学史』下卷(昭和六二年、恒星社厚生閣)
- (3) 本学図書館に収蔵された段階で本史料群包紙中に収められていたようである。
- (4) 現状で上から順に付番を行った。
- (5) 本稿での翻刻凡例は次の通り。
 - ・漢字の旧字・異体字は常用漢字・通行の字体に改め、適宜読点・並列点を付した。
 - ・変体仮名・合字はひらがなに改めた。ただし助詞の「ニ」「者」「而」等はそのまま小字右寄せとした。
 - ・朱筆は『、割注は「」で示した。掛紙は「用紙」を該当部分に示し、文末に掛紙の翻刻を掲げた。
 - ・表敬の關字は一字あげ、平出は二字あげ、台頭は三字あげで示した。
 - ・文字の誤用等については原史料通りとし、分かりにくい場合のみ(ママ)等を付した。
- (6) 國學院大學図書館デジタルライブラリー「土御門家記録」安政五年戊午徒八月上旬至九月下旬 彗星出現一件 2018 貴2208」カテゴリーは「史学：法制関係」、全32点(付番なし、包紙は各一括史料最初の画像内にあり)、配列は本稿と同じ。
- (7) 國學院大學研究開発推進機構校史・學術資産研究センター編集・発行、平成二七年
- (8) 註3では八一七(変異の際勘文雛形)・八一二二(彗星出現につき様子等差出書)となっているが、本稿での調査によりこの二点の接合が判明した。
- (9) 大学は元宿の大角か。